**週刊やすいゆたか**’12年１月26日第16号

**西田幾多郎の人生**

今日26日は、西田幾多郎の人生について京都ラボール学園で語ることになっている。彼の人生と彼の哲学がどう論理的につながっているのか、明確に説明することはなかなか難しい。ただアリストテレスは哲学は驚きが動機だとしたが、西田は哲学の動機を人生の悲哀に求めた。その意味で彼の人生をたどることは大きな意味がある。

幾多郎は一八七〇年、明治３年生まれだが、父得登(やすのり)が戸籍を二年ごまかした。西田の実家は十村と呼ばれる大庄屋で、父は小学校を長楽寺という西田家の菩提寺から実家に移したほどの人だった。13歳で師範学校に進学したが、チフスで姉は死に、彼は休学した。

16歳で学者になる志を抱き石川県専門学校入学、そこは第四高等学校になる。恩師北条時敬と出会うも、彼は転出し、学校は薩摩藩閥の武断主義になり、西田幾多郎と仲間たちは反抗的となり、行状点が悪く落第した。

結局学校をやめて自学するも目を患って入院する。彼はその惨めな気持を「秋の野に錦を敷ける草花の蔭にやどれるきりぎりすかな」と歎じている。

東京帝国大学文科大学哲学科選科に入学するが、本科との差別は厳しく、落伍者のような扱いをされ、卒業後もなかなか仕事がなかった。25歳で結婚するが、家庭が足かせとなって、思い切った行動がとれず、すぐに後悔している。

父親は新しい時代についていけず、財産を取り崩すし、女癖も悪く、夫婦仲はよくなかった。幾多郎達は母寅三(とさ)に味方したようで、父は妻子四人菩提寺の参拝焼香をさせないように寺に遺言依頼状を出している。

舅と幾多郎の妻寿美との間も険悪で、舅にいたたまれなくなって長女をつれて実家に戻り、一時離婚している。この離婚期にできたのが長男謙である。

父死後、寿美と和解し、よりを戻す。四高のドイツ語講師の職を解かれて困っていたところ、恩師北条先生が山口高等学校に招聘してくれる。そして北条先生が第四高等学校の校長になったので、いよいよ正式に第四高等学校の教授になったのである。

その翌年幾多郎30歳の年に日露戦争の旅順城攻略で、弟憑次郎が名誉の戦死を遂げている。「人生はいかに悲惨なるものに候わずや」と親友山本良吉に手紙している。

彼は弟の犠牲の上に為された講和が帝国にとってあまり好条件でなかったことに腹を立てている。それで戦勝で浮かれている国民に批判的である。それに今後さらに泥沼の戦いが続き悲惨な将来が続くのではないかという危惧からである。

彼にとっては家庭内のいざこざ、家族の病気、進学や仕事での挫折、学問上での悪戦苦闘それらすべての人生の生の経験こそが哲学の源泉であった。それらを客観的に対象化して、観察や分析するのではなく、その経験そのものを実在として受け止める哲学を求めたのである。

学生たちはなかなか理解できなかったので、彼の講義ノートを借りて印刷して配布した。それが『善の研究』の重要な構成部分になっている。講義で展開した純粋経験こそが実在であり、善であるという議論を踏まえて、純粋経験とは何か論じた論文を加えたのが後に『善の研究』となる。

彼は講義ノートや論文をかつての学友や北条先生に送付して、それで大学での仕事をゲットしたのだから、この学生の協力はありがたかっただろう。

彼の講義は難しすぎたが、それなりに迫力があり真実があったので、その力でもあるが。

彼の家庭の不幸は「ヨブの苦しみ」にたとえられたぐらいである。37歳の時は１月に幼女の次女幽子を６月に生まれてひと月の愛子を亡くしている。

49歳の年に妻寿美が脳出血で倒れ５年間寝たきりで死んでしまう。倒れた翌年に長男謙が腹膜炎で倒れ、双月で帰らぬ人になった。「すこやかに二十三まで過ごし来て夢の如くに消え失せし彼」

その二年後四女友子、六女梅子がチフスで入院した。
「妻も病み子等亦病みて我宿は夏草のみぞ生い繁りぬる」
「運命の鉄の鎖につながれて打ちのめされて立つ術もなし」

西鶴なら、大坂商人は商売でにっちもさっちもいかんようになったら、もう笑うしかないと言って、笑いを求めるので、それで矢数俳諧で大いに笑わせたと夕べのＮＨＫでやっていた、西田の場合は場所の自覚となる。
　「わが心深き底あり喜も憂の波もとどかじと思ふ」

大いなる意志となり、「純粋経験」となづけた生き生きとした経験に生きようとしたのであるが、現実には意図せざる不幸が押し寄せる。たしかに経験こそが実在であるにしても、経験自身がそれを包括する場所としては、経験の内容を超えた絶対無でなければならないということだ。

この絶対無としての場所と経験は別物というわけではない、あくまでも経験自身が経験を受け止めているのである。ただその中身の何かを問わず、場所はあるということである。
　中身は青春や仕事の挫折であったり、父との葛藤であったり、弟の戦死、幼い娘や成人したばかりの長男の急死、妻と娘が病気で枕を並べることであったりする。具体的な有であり、その消滅の無である。それらと絶対的に区別されたそれらを受け止める場所は絶対無だというわけなのである。（次週に続く）

　　**大阪都構想への注文**

大阪都構想について堺屋太一さんなども積極的に発言され、度肝を抜くような驚きのあるプランや建造物をということらしい。

まあ大都市には世界一のビルや塔が建てばいいし、巨大スクリーンを設置したり、道頓堀川を大プールにしたりして名物をつくるなどできればいいだろう。

しかしそういうのは箱ものの発想であり、財政難の折にそういう物質的な発想は、巨大カジノ同様の心貧しい発想である。

東アジアとの交流の拠点としての大阪都を明確にして、その為の制度や学校、厚生施設、居住区の整備などを早急に進める必要がある。

もちろん東アジアの商社や企業が事務所や工場を建設したり、日本企業との交流が大規模にできる機構などを整備することが必要である。

東アジアとの交流を考えるのなら、当然河内王朝の歴史的伝統を見直して、難波津、難波宮、住吉大社、百舌鳥・古市古墳群などの歴史的観光地とその周辺の環境整備などを前面に押し出すべきだ。橋下・堺屋の大阪都構想ではそこのところが見受けられないのは非常に残念である。

日本の古都と言えば京都・奈良・鎌倉となっているが、それらよりもっと古くて、しかも国際的に重要であったのは難波である。そして日本の原郷としての河内を打ち出し、世界に和の精神を発信することが大切ではないのか。

戦士ヤマトタケルが平和の鳥である白鳥になって舞い戻ったのが、河内湖で河内湖とその周辺の湿地帯は白鳥をはじめとする鳥たちの天国だった。この幻想の河内湖のイメージも売りではないのか、環境問題を考えるときにも河内湖がなくなって行った歴史を振り返ることは大切である。